© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

『あーしの特級厨師ちゃん』
～今西太后が見染めた小さな料理人～

古今東西、権力の座に就きし者たちはこぞって美食を極めんとした。
なかでも清王朝にあって権勢を誇った西太后は、美食をもってして若返りを図るために腕利きの特級厨師を従えていたという。

「――で、ありますから、格式の高い美食でアンチエイジングをメインテーマとし、ターゲットを意識の高いリッチ層の女性に絞り込んで展開していくことで……」
「いんじゃね。とりま、その方向で企画よろたん」
「あ、ありがとうございます。社長」

株式会社マウンテンウィッチ代表取締役社長萬場盟華。それが現在のわたしの肩書。読者モデルを経て、わずか数年で年商三十億円のアパレルメーカーにまで築き上げた。

「社長、それで後は……」
「あー、それな、わーってるって、メインの料理っしょ」
「はい、伝統的な技法を用いつつ、斬新な創意工夫のできる料理人が本企画には必要不可欠となっております」
「おっけー、そこはあーしにまかせてって言ったしね。ちょ、とりま、今から行ってくるわ」

半年前に移転した青山通り沿いの本社ビルを後にして、わたしは駅のトイレに駆け込む。
目的はただひとつ、萬場盟華が萬場盟華たるアイデンティティーともいえるこのガッツリメイクを落とすためだ。

「はぁ……なんでふぉんぴー、あんなこと言うのー……」

はじめて逢った時――盟華、お洒落ネ！ アタシも真似したいヨ――そう言って、あの娘はわた

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

しのメイクをはじめとしたファッションセンスを褒めてくれていた。
一緒にお買物だってして――盟華のアドバイスすごいネ――って、喜んでくれたよね。
それなのに――そんな手ダメヨ！　ネイル落とすいいネ！――すでにネイルを落とした自分の指先に視線を落とすと、今日もため息が零れてしまう。
メイクを少しずつ落としていくたびに――厚化粧してお店に来るダメヨ！――あの娘の言葉が蘇り、涙が出そうになる。
「あー、もうテンション爆サゲ。こんなん天下の萬場盟華らしくないし」
自分で自分を鼓舞してみるものの、どうしてあの娘の態度が急変したのか皆目見当もつかず途方に暮れてしまう。
そもそもわたしは、今回の企画を部下から提案されたとき、ひとつだけ注文を付けた。
それが――メインの料理は中華の宮廷料理にすること――だった。
この選択は、わたしにとって至極当然のことだった。今後の社運を左右する大きなプロジェクトを前に、中華料理界で燦然と輝く王一族の血統と技術を色濃く受け継いでいる料理人・王 紅花を使わない手はない。
それに――ぜったいふぉんぴーにもチャンスじゃん――わたしは、そうあの娘に伝えた。
このプロジェクトをお互いに成功させることができれば、きっとお互いが望む名声が手に入るはずだ。
「なのにさぁ……」
それなのに、わたしの話を聞いたあの娘は激怒し、それまで良好だった二人の関係に亀裂が入った。

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

出逢ったばかりの時、あの娘は満面の笑みで――タンメン食べたいなら、いつでもくるよろし――そう言ってくれたのに。
今では――タンメン食べたい？　別の店いったらよろし――って言って、いつも味気ないスープしか飲ませてくれなくなった。

「これってやっぱ、ガチヤバっしょ……」

そうだ。そうなんだ。わたしはあの娘に……だから気が重い。
でもわたしは、株式会社マウンテンウィッチの代表取締役社長　萬場盟華だ。
「それは、それ。プロジェクトはプロジェクトっしょ……」
こうしてメイクもネイルも落として、まさに〝すっぴんのわたし〟は、重い足取りで池袋にある高級中華料理店・紅龍園に向かうのだ。

「ちょ、ちょりーっす……ふぉんぴーいるかなぁ？」

わたしが店に入ると、彼女は黙ったまま、わたしの頭の天辺から足の爪先までじろじろと物色し、うなじに鼻先を近づける。
ここ最近、恒例となった儀式がはじまる。

「あ、ちょ……」
「動くダメネ」

化粧や香水の匂いは食材の敵だ。だから彼女は、わたしの匂いを嗅いでいる。

「手、見せるヨ」
「はい……」

差し出したわたしの手を彼女は乱暴に扱う。

「厨房入るいいネ」

この儀式が終わる頃、わたしは緊張と気恥ずかしさのせいで大量の汗をかき、鼓動はパンク寸前

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

となる。だが、これをしないと彼女はわたしを厨房に入れてくれない。

「盟華、喉乾いたカ？」

「うん……ちょっと……」

そういうと彼女は、わたしを厨房に招き入れ、湯飲みに入った琥珀色の液体を差し出してきた。喉の渇きに堪えきれず、その液体を一気に飲み干したわたしは、度数の高いアルコールの味と共に何か生臭い獣の匂いがして咽てしまった。

「ゴホッゴホッ、こ、これ、なんなの？」

「昔から伝わる秘酒ネ」

彼女が指さした瓶を見て、わたしは卒倒しそうになった。

「これ、滋養強壮にいいネ」

そうだね。だってこの瓶の中に入ってるのって……あ、そっか、わたし、こんなもの飲まされるほど……そう想ったら、これまでずっと耐えてきたものが堰を切って溢れでてしまった。

「ごめん、ごめんね、ふぉんぴー……」

「やとわかたカ？」

「うん……あーし、バカだから……今、やっとわかった……」

うん、やっとわかったよ。わたしは貴方に、これほどまで嫌われちゃってたんだって……。

「あーし、ふぉんぴーに……嫌われちゃったんだね……」

ダメだ、もう逃げ出したい。

「はぁ？　なに言てるネ。いつアタシが盟華を嫌い言たカ」

「えっ？」

そういうと彼女は、またあの味気ないスープを

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

出してきた。
「やぱり伝統的な佛跳牆（ぶっちょうしょう）だと味気ないネ」
「佛跳牆？」
「そうネ、中華の贅を尽くした伝統的な宮廷料理ヨ　体には良いけど味の工夫はまだ必要ネ」
「味の工夫？　どうして？」

「どうしてって、盟華がアタシに宮廷料理作れて頼んだネ。忘れたカ？」
「でも、ふぉんぴー怒ってたっしょ……」
「もちろん、あの時はアタシ怒たヨ」
「だから、あーし、嫌われたって……もう終わりだって……」
「はぁー……ここまで盟華がバカとは知らなかたヨ。もう怒る気も失せたネ」
「でも、でも……」

「アタシ怒てたのハ、自分の体調も管理できないくせに盟華が仕事、仕事ばかり言うからヨ」
「そ、それは……」
「アタシ知てるネ、盟華、頑張り過ぎヨ。濃いメイクで隠してたらアタシ盟華の顔色もわからないネ」
「えっ？　うそ？　そっち？　あーし、嫌われてたんじゃなくて……」

「盟華、アナタ、アタシにどうして欲しいカ？」
「アタシは、名誉とかチャンスとかそんな社長の盟華の言葉じゃなくて、そのままの盟華の言葉で教えて欲しいだけネ」

あ、そっか。わたし、ものすごい勘違いを勝手に独りでしちゃってたんだ。
ずっと変わらず紅花は、わたしをものすごく愛してくれていた。
わたしへの厳しい言葉も、あの儀式も、思い出すのもいかがわしいあの秘酒だって、みんなみんな……それなのに、わたしそんなことにも気がつかないなんて……。

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

「ほら、ちゃんと言うよろし」
「えっと、あーしは、ふぉんぴーに美味しい料理を作って欲しいです」
「はいネ」
「で、それから、できれば、前みたいに……あーし専属の特級厨師でいて欲しいです……」
「はいネ」
「そ、それと、これからもずーっとよろしくお願いしますっ」
「はいネ。盟華の言葉、ちゃんと聞こえたヨ」

わたしの想い人は、世界で一番最高の特級厨師だった。

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

<後書きに代えて――お手に取って頂いた皆様へ、心から感謝を込めて――>

アイデンティティーとは何なのか。
いくつもの要素が重なりあったそれを、ひとつ、またひとつと脱ぎ捨てていった先で、しっかり大地を踏みしめて立っていられるのでしょうか？

ふと、そう考えてしまうことがあり、想像を広げていくと怖くなる時があります。

アイデンティティーを喪失した自分を、自分だと認めることができるのでしょうか？
そんな私は私ではないということに他ならないと、私自身が想っているから……。

けれども、それでも私を私と認識してくれて、微笑み、強く手を引き、隣を歩いてくれる人がいるとしたら、これを幸福と呼ぶはずであると、そう想いながら、このお話を考えてみました。

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.

© 2017-2019 Pyramid,Inc. / COLOPL,Inc.